

《鼎談》 少年詩の豊かな拡がり



菊永 謙(左)・はたちよしこ(右)・海沼松世(中・司会)
2015年6月21日 於：日本児童文学者協会事務局

新しい詩脈の出現

海沼 二一世紀に入り一五年が経とうとしていきます。今日は、この新しい時代の少年詩は今、どのような状況にあるのか、新しいテーマや表現手法、様々な模索や試みのある詩集が生まれているのかなど現状を見つめるとともに今後の課題についても認識し次なる世代に繋げていきたいと考えています。

まず、この一五年間に印象に残った詩集をそれぞれ一〇点あげていただきました。そのリストをもとに少年詩の現状をみていきたいと思えます。三人が取り上げたのは間中ケイ子さんの『猫町五十四番地』です。菊永さんから選んだ理由などお話しください。

菊永 これは三越左千夫少年詩賞と児童協の協会賞をもらった詩集で、短詩の連作でしかも俳句とコラボしているところに特徴があります。そして、猫の目を通して自然や社会を見ながら柔らかな批評になっていて子どもにも読める。今までになかった詩集ですね。抒情的であるが同時に柔らかな社会性やチクリとした風刺も含んでいて面白かった。意表をつかれた詩集だったと思います。

海沼 いま菊永さんが言われたように詩と俳句の組み合わせという新しい表現方法は少年詩にとって初めての試みです。少年詩の歴史に新たな一ページを開いた貴重な一冊といえるのではないのでしょうか。しかも軽妙でウイットに富んでいる。

作品の中で、私は「肋骨が笑う」という「冬の猫」や「へどこか遠くへ行きたい／夕暮れの町を／たった／一本の骨になって／歩きたい」という「卒業」という詩に惹かれました。これが間中さんの詩の本質ではないかと。どこか種田山頭火や尾崎放哉の世界に通じるものがありますね。はたち そうですね。今までにない新鮮な感じがしましたね。いま、海沼さんがおっしゃったように「卒業」の「へたった／一本の骨になって／歩きたい」が心に残りました。タイトルが「卒業」で「一本の骨になって／歩きたい」から純粹なものが伝わってきました。俳句と詩に不思議なバランスがあるようでした。

